



わたしの聖戦

女性が働くところについて

128

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

人間のこころの底

有名な心理学の実験に、「ミルグラム実験」と「スタンフォード大学の監獄実験」がある。

前者は、1963年エール大学でスタンリー・ミルグラムによって行われている。年代からみてもわかるように、当時は、第二次世界大戦時に起きたナチスによるユダヤ人迫害の実態が明らかになり、その残虐さに関心が高まった時代。人は命令されれば、本当にあんな酷いことができるのだろうか？——この実験のテーマは、まさに「人は命令されるとどこまでそれに従うのか」というもので、人間の忠誠心や服従性を追求する内容であった。公募で集められた「教

師役」と、「監視役」「学生役」が登場人物。この中で何も知らされていないのは教師役で、あとの二役はサクラである。まず、教師役が学生に問題を出し、学生がそれに答える。もし間違っていたら教師役は電流を流すスイッチを押すこととし、間違えるたびに15ボルトずつ電圧をあげていく。教師役と学生の間には仕切りがあり、互いに姿は見えないが声だけは聞くことができる。実際は、教師役がスイッチを押しても電流は流れないが、いかにも流れているかのようになりアクションをテープで流すという仕組みである。学生の声は電圧を上げること悲鳴

に近いものに変わり、次第に壁を叩いて実験中止を訴えたり叫んだりといったオーバリアクションになっていく。悲鳴に耐え兼ねて教師役が途中で止めたいと申し出たときには、監視役が教師役を実験を続行するように命令を下すのである。さて



止を申し入れたが、続行するように言われると大部分はそれに従ったのである。ミルグラム実験の結果に影響を受けたのが後者である。「監獄実験」とあるとおり、大学内に作った監獄が舞台。ボランティアで募った男性を「看守役」と「囚人役」に無作為に分け、それぞれの役割に応じて彼らの行動がどのように変化していくのかを観察した。看守役には制服とサンガラスをはめさせ、一方の囚人役は布でできたスモック一枚だけを着せ、足には鎖をつけるという念の入れよう。ただし、暴力は禁止とした。

結果はいかに——。用意されていた最大のボルト数は450であったが、なんと教師役（被験者）40人中25人（62・5%）が450ボルトまで電圧を上げ続けたという。しかも300ボルト以前に実験を中止したものは皆無であった。もちろん、何人かは途中で中

結果は、2週間の予定だったものが6日で打ち切りとなってしまう。誰かに命令されたわけでもないのに、看守は独自の判断で囚人に罰則を与えるようになり、次第に禁止されているはずの暴力も発揮するようになる。

この実験によって、元々の性格とは関係なく、人は与えられた役割にふさわしい行動を取るようになる、との結論が得られた。

権力を持ち、人を支配するという行為は、その人のパーソナリティとはほとんど関係ない。役割に忠実であろうとすればするほど、また真面目であればあるほど、人の理性は失われ、ときに凶暴性を帯びていく。しかも、看守役と囚人役のどちらがいいかと聞くと、80〜90%の人は看守役を選ぶのだ。

人間のこころの底には、果てしない闇が無限に広がっているのだろうか。否、闇だけではないと信じていたい。心理学という学問は、闇の彼方にある光の可能性を見出し、その存在を信じたいという真摯な気持ちに込めるため、にこそあるのだと思う。

イラスト・伊藤栄章